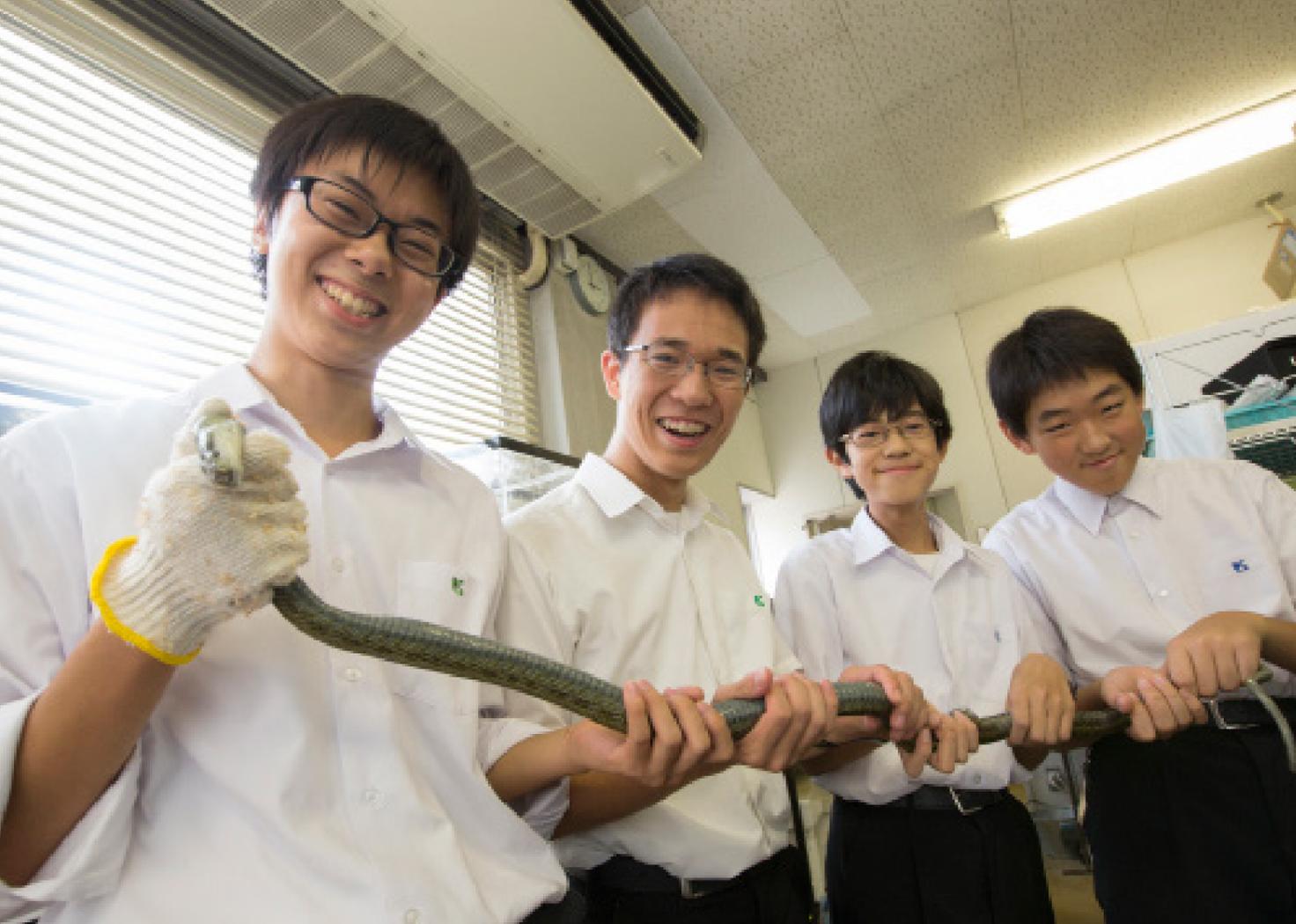
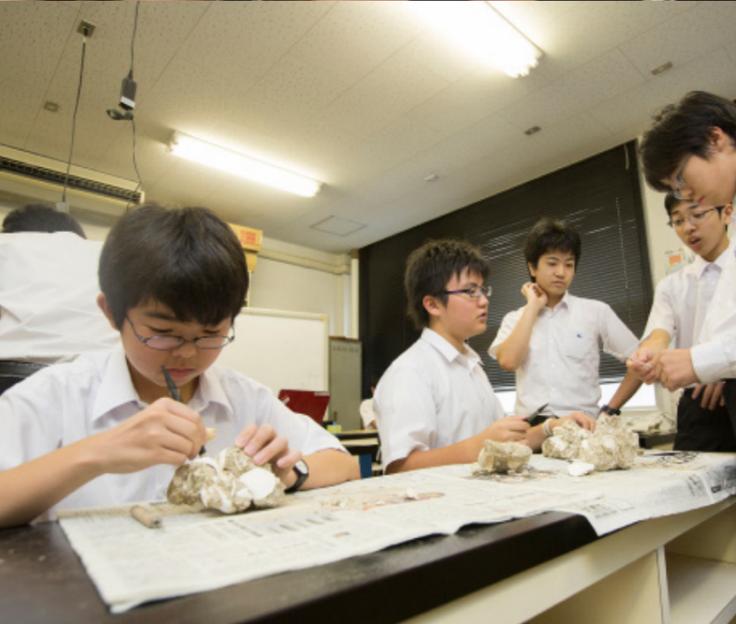


グローバルリーダーの卵たち

「国家・社会に有為な人材を育成する」という建学の精神の下、1891年の創立以降、時代が求める人材を輩出してきた。現代社会において求められる「新しい人間力」「新しい学力」とは？ 他者を理解し、尊重し、協働することで新しい価値を創造する喜びを体感するプロジェクトアドベンチャーやドラマエデュケーションといった体験型のプログラム。価値観が多様化するなかで揺らぐことのない価値軸を身に付けるためのリベラルアーツ教育。海城が日本の中等教育をけん引する。





地学部化石清掃中



イングリッシュキャンプはディスカッションが中心



海城祭に向けて巨大コリントゲームを制作中

「もしエイリアンが出てきたらどうすんだよ?」「仲良くなるしかないんじゃないか?」マジメな顔で議論する生徒たち。夏休みに行われたイングリッシュキャンプでの一幕だ。昨年度からスタートしたこのプログラムは中3希望者対象の初級コースに加え、今年度より中3・高1の希望者を対象とした上級コースを設置。ネイティブの先生の下『Mission to Mars』という解のないテーマに挑み、最終日前夜にプレゼンテーションを行った。3日間の英語漬け生活ながら、笑顔が絶えなかった生徒たち。「去年参加して英語に親近感がわき、帰った後も身近なものに感じることができました。今年度はディス

カッションをすると聞いて、英語だけで本当にできるのかなと思って。火星がテーマで本当にむずかしいですけど、みんながいるんな意見を持っているから、みんなで話し合うことで一つのものができるがっていいって楽しかったです」(中3)。「日本語でも大変なテーマかなとも思いました。でも、創造力も必要だからおもしろい。他の班から出ないような独創的なものを出したいと、みんながんばりました」(中3)。「高1としては授業で習ったことで話せるのでむしろかしくはなかったです。ただ、とっさに話すとなると案外出てこないもので、そこが大変でした」(高1)。「英語があまり得意ではないんですけど、



2012年卒業生の出納桑君

「男子はどこでスイッチを入れるか。そこでガラリと変わります。このイングリッシュキャンプもスイッチの一つ」。そう話すのはグローバル教育部長の春田裕之先生。「ほかにも希望者を対象とした中3でのアメリカ研修、高1でのイギリス研修。そこで刺激を受けて海外大学に進学した卒業生もいますよ。その卒業生の一人、出納桑君(2012年卒)は現在、キングス・カレッジ・ロンドン(ロンドン大学)の哲学部で学ぶ。9月には、夏休みで一時帰国した彼を囲む会が催され、海外大学進学に関心のある生徒・保護者が集まった。その席で海外大学に進学した理由の一つとして『多様性が創り出す可能性に心を動かされたこと』を挙げた。ロンドンではすれ違う人、10人が10人とも違う。みんなが違うことが前提としてあり、違う人間だからこそ1+1が3にも5にもなる。多様性もたらす力は本当に大きいんです。だから、海城は今、積極的に帰国生を受け入れていますよね。現代の成熟した近代社会においては、正解は一つという認識ではなく、正解がない中で最善の策を求める営みが求められています。みなさん、もすぐにその場に遭遇することになりますよ」

海城がめざす グローバルリーダー教育

加速するグローバル社会。海城は常に時代のリーダーとなるべき人材を輩出している。では、グローバルリーダーを育てる教育とは?「日本人としてのアイデンティティーの確立と同時に、広く世の中を見られる素養を培っていかねばならない。それから感受性も豊かでない。例えばニュースを見ても漠然と捉えるのではなく、次に自分が行動できるよう調べてみよう、行ってみようという主体性を持って行動することが大事。幅広く興味を持ち、問いを立てること。得た情報を分析し、判断し、発信できるように。人間の核をつくっていくような、人としての基盤になるようなものを植え付けていきたいと思っています」と春田部長。今年度中には新たな試みがスタートする予定だという。「海城はいろいろな勉強法の先駆け、まだみんながやっていないことをどんどん進めていける学校だと思っています」。誇らしげに話す生徒から、先生に対する厚い信頼を感じた。

イギリスが僕を変えた

今、社会で活躍するには英語が話せないことや、職業にしろ海外の人と接することはあると思うので、実用的な英語を身に付けようと思いはじめました。英語力だけでなく、自分で想像していく、その場面をどういう風にしていたらいいのかを英語とともに自分で考えることができたので、一石二鳥という感じがします」(高1)